CEL からのメッセージ

「住まいと生活に関する意識調査結果」の概要（前編）

大阪ガス エネルギー・文化研究所 所長 真名子 敦司 Written by Atsushi Manago

大阪ガス エネルギー・文化研究所では、現在、生活づくり・生活環境づくりのソリューション提案のために、生活者の視点に立って「住まい・生活」「エネルギー」「環境」「都市」という四つの研究領域の様々な課題に取り組んでいる。

「住まい・生活」について生活者が現在抱えている問題や期待している将来の姿や方向、それらのギャップを埋めるための方策や社会のあり方などを分析・研究することを目的に、今年はじめ、「これからの住まいとライフスタイルに関する生活意識調査」を実施した。

当研究所の研究員が、その結果を本誌の今号と次号に分けて報告する。ここでは、調査結果の概要を二回に分けて紹介したい。まず今号では、「住まい・生活」分野について取り上げる。

なお、今回の調査の全質問・回答を当研究所のホームページ（URL:http://www.osakagas.co.jp/cel/）に公開した。

今回の調査にご協力をいただいた回答者の皆様に感謝申し上げる。

現在および将来の生活について

1 望む生活スタイル

「精神的に豊かな生活をしたい」と思う人（「どちらかといえばそう思う」人を含む。以下同様）は九五パーセントで、「経済的・物質的に豊かな生活をしたい」と思う人の比率九割を上回る。関連する生活価値に関する設問に対して、「出世より自分の人生を楽しみたい」「収入は少なくてもやりがいのある仕事をしたい」「世間の目を気にせず、好きな人生を送るのがよい」と思う人は四割を超える。また、日常の生活では、「家族団欒」「趣味・スポーツ」「ゆったりと休養」「知人・友人との会合」に充実感を覚える人が多く、「仕事」はその次にくる。

物質的な豊かさが満たされているといわれる現在、精神的な豊かさと調和のとれた生活を求める人が増えている実態が窺える。

2 子供の出産を望まない適齢期女性

最近、我が国の出生率は急激に低下しつつあり、昨年は合計特殊出生率が一・二九まで落ち込んで過去最低を更新した。このような急速な出生率の低下が、我が国の将来にもたらす様々な悪影響が懸念されている。

回答者全体では、「結婚しても、必ずしも子供を産む必要はない」と思う人が三割弱、「産む必要がある」と思う人は四割弱で、「産む必要はない」と思う人を上回っている。しかし、四〇代未満の出産適齢期にある女性は、「産む必要はない」と思う人の方が「産む必要がある」と思う人より多く、三〇代の女性では「産む必要はない」と思う人が四割を超える。地域別に見ると、「産む必要はない」と思う人が大都市で多く、地方ほど少ない傾向がある。

3 現在の生活の満足度

六割近くの人は「生活全体の充足度」に満足している。生活の各側面の満足度を問う設問のうち、「人間関係」「生活の自由度」「自分らしい生活」などについては五割以上の人が満足している。しかし、「未来に対する希望」「労働」「耐久消費財」「消費生活」に満足する人は三割台に低下し、不満な人が二割台に増える。「収入」に満足な人は二割、「資産」に満足な人は一割強に対し、不満な人はいずれも約四割で、満足な人を上回る。

九割近くの人が「経済的・物質的に豊かな生活」とともに「精神的に豊かな生活」を求めており、自分流の生活に満足しつつも、依然として経済的・物質的な欲求が強いようだ。

4 現在の生活レベルの自己評価

現在の自分の生活レベルを世間一般から見た場合、「中の中」と評価する人が約半数、「中の下」は三割弱と「中の上」の一割を加えると九割を占める。地域別に比較すると、「中の中」は都市部では五割に対し、地方では六割にも達する。性別に見ると、各年代とも女性の方が「中の中」意識が強く、二〇～三〇代の女性では六割以上を占める。「中の上」意識を持つ人も六〇代を除いて女性の比率が高く、「中の下」意識を持つ人は各年代とも男性の比率が高い。

総じて、男性より女性の方が、自分の生活レベルの評価は高いようだ。

5 望む将来の生活像

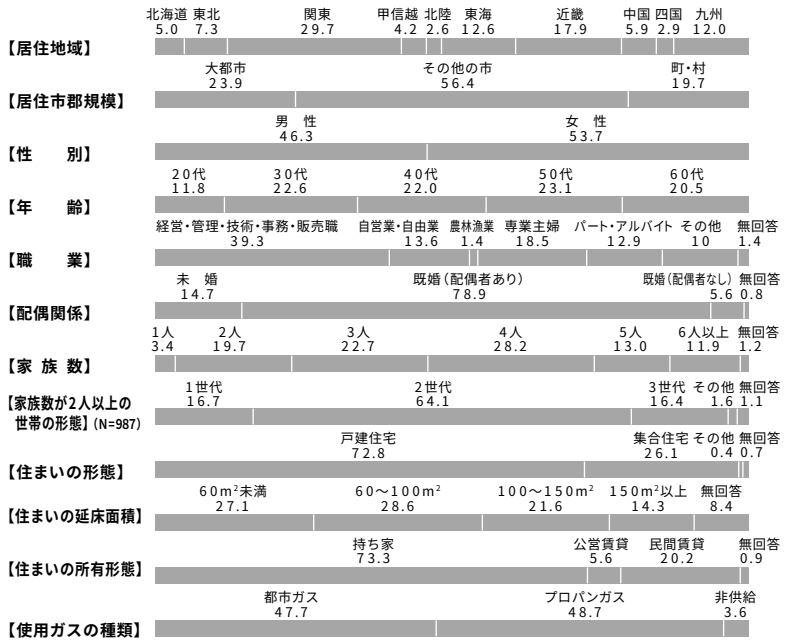
一〇年後の望ましい暮らし方として、八割以上の人が「安定した収入が確保できる暮らし」「家族との団欒を大切にした暮らし」「仕事・遊び・家庭のバランスのとれた暮らし」「趣味・楽しみを中心とした暮らし」を望んでいる。特に、四〇代以下の人に多い。「一人暮らし」「自給自足暮らし」「都会的でおしゃれな暮らし」「仕事第一の暮らし」を望む人は少ない。少数派の中にあって、五〇～六〇代の女性は、同世代の男性や他の年代の女性に比べて、「一人暮らし」を望む人の比率が、一際大きいのが特徴である。

一緒に暮らしたい人として、五割以上の人が「配偶者・子供」または「配偶者」をあげる。一方、「親」または「親・配偶者」と暮らすことを希望する人は少なく、親は一緒

調査条件

調査時期	平成17年1月27日～2月14日	抽出方法	層化2段無作為抽出法
調査対象者	全国の満20歳～69歳の男女	有効回答数	1,034人（回収率68.9%）
調査対象数	1,500人	調査方法	留置記入依頼法

回答者のプロフィール（N=1034　単位%）



に暮らすパートナーとしては敬遠されているようだ。ただし、地域別に見ると、地方では都市部に比べて親との同居を希望する人が相対的に多く、希望しない人を上回っている。

現在および将来の住まいについて

1 現在の住まいの選定時に重視したこと

現在の居住地の選定時に「交通の便がよい」ことを重視した人が最も多く、五割を超える。その他の重視した項目は、回答者が多い順に、「近くにスーパーや商店街がある」「実家が近い」「周辺に自然が豊富にある」「地域イメージがいい」などである。

一方、現在の住宅の選定時には、「価格」を重視した人が最も多く、六割を超える。その他の重視した項目は、回答者が多い順に、「間取り」「最寄り駅からの距離」「広さ」「部屋数」「住戸の向き・採光」などである。

2 現在の住まいの満足度

現在の居住地に満足している人は七割、「不満」な人は一割で、多くの人が満足しているようだ。特に、女性の七割以上が満足しており、二〇代の女性では八割を超える。地域別に見ると、都市部ほど満足度が高く、地方で低い。一四大都市では七割強の人が満足しているのに対し、町村部では六割強の人が満足する一方、二割弱の人は不満という。

一方、現在の住宅に満足している人は居住地に比べるとやや少ないものの、六割弱の人は満足という。なお、住宅に不満な人は三割弱で、居住地よりも不満な人が多い。現在の住宅に満足な人も不満な人も、居住地に比べると、性別や地域別による差は小さい。

3 望む将来の居住地

一〇年後に住むところとして、七割の人が「緑が多い落ち着いた住宅地」を望んでおり、年齢や地域によらず最も多い。

次に望む人が多いところは「田畑や森などが豊かな里山、農山村」「都心に近く便利で賑やかな市街地」で、いずれも三割の人が望むという。一方、望まない人が多いところは、「最近開発された新しい郊外住宅地」「海や山など自然が近いリゾート地」「都心に近く便利で賑やかな市街地」などで、いずれも四割以上が望まないという。年代別に見ると、「田畑や森などが豊かな里山、農山村」は高齢者ほど、「都心に近く便利で賑やかな市街地」は若年者ほど望む人が多い。次に、地域別に見ると、一四大都市では「都心に近く便利で賑やかな市街地」、町村部では「田畑や森などが豊かな里山、農山村」を望む人が多い。

この結果から、年代や現在の居住地域によらず、理想の住宅地は「緑が多い落ち着いた住宅地」で、不人気な住宅地は「最近開発された新しい郊外住宅地」といえそうだ。

4 望む将来の住宅

四割弱の人が、将来の住み替えや改築・建て替えを考えているという。その内容は、「他地域の住宅に住み替える」「現在の居住地域内の他の住宅に住み替える」「現在の住宅を改築または建て替える」などである。

住み替えや改築・建て替えの理由として、「生活の快適性・利便性のため」というのが五割を超える。

望む将来の住宅について、三割以上の人が「建築家の設計で注文住宅を建てる」という。その他を回答者の多い順にあげると、「住宅メーカーの住宅を建てる」「親族から相続もしくは親族と同居する住宅を改築する」「既築の一戸建住宅を購入・改築する」「中高層の新築分譲マンションを購入する」「新築の建売住宅を購入する」「民間の賃貸マンションを借りる」などである。

当然ながら、地域によって望む住宅の形態は異なっており、戸建住宅の新築や相続住宅の改築は地方に多く、既築戸建住宅の購入・改築、新築マンションの購入、民間マンションの賃貸などは都市部に多い。

食生活について

1 調理習慣や食生活

四〇～五〇代の女性の九割は家庭で調理を担当し、同世代の女性の八割以上が週六～七日調理をするという。家庭で主に調理をする女性は、六〇代が九割弱、三〇代が八割、二〇代が四割強で、四〇～五〇代をピークに他の年代では調理の担当が女性から他の家族へ移っているようだ。六〇代の女性の代役は子供や配偶者、二〇～三〇代の女性の代役は親や配偶者である。

調理をすることが好きという人は全体で六割弱である。性別に見ると、男性五割、女性六割弱で、意外に男性が多く女性が少ない。逆に、調理が面倒という人は全体で三割強、男性三割弱、女性四割弱で、意外に男性が少なく女性が多い。

夕食の調理時間は、平日も休日もほぼ同じで、三〇分未満の人が二割強、三〇～六〇分未満が六割弱、六〇分以上が一割である。ただし、休日は平日に比べて調理をする人が増え、調理時間も伸びる傾向がある。

また、休日には、夕食を一人でとる人が減り、配偶者や家族と共にする人が増える。平日の夕食は主に外食という人は二パーセント弱で、そのほとんどは三〇～五〇代の男性と二〇代の女性であり、仕事上の付き合いや友人との食事が多いようである。休日は平日に比べて、主に外食するという人の割合がわずかに増え、しかも各年代層にわたっていることから、家族で外食するのは休日の方が多いようだ。

CELからのメッセージ

2 現在の食生活の満足度

現在の食生活に満足している人は八割弱である。不満な点は「栄養のバランス」という人が最も多く、三割を超える。特に二〇代の人が多く、四割を超えている。若い人ほど、また都市部において、「栄養のバランス」に不満な人の比率が高い。その他の不満な点は、回答者が多い順に「安全・安心」「経済性・節約できない」「農薬など」「生ごみの処理」「分別回収が面倒」などである。

現在の食生活について、「回答者本人や家族の食生活を変えることが必要だ」と思う人は四割弱である。変える必要があると思う理由として「家族の健康のため」という人が最も多く、次いで「自分の健康のため」「節約のため」などをあげる人が多い。

3 現在の台所や設備の満足度

現在の台所の広さに満足している人は五割、不満な人は四割弱である。現在の台所の広さ（DKやLDKでは、ダイニングルームやリビング・ダイニングルームを含む。以下同様）は六畳未満が約半数を占める。

一方、台所の設備に満足している人は五割弱、不満な人は四割弱である。加熱調理器具の普及率トップ5は、電子レンジ、ガスコンロ、オーブントースター、ホットプレート、卓上コンロで、前二者の普及率が約九割、後三者が約八割である。ちなみに、最近話題のIHクッキングヒーターの普及率は一三パーセントである。

4 理想の台所

「六～八畳」「八～一〇畳」「一〇～一六畳」を理想的な台所の広さという人は各々二割弱である。

現在の台所は「DKまたはLDKにある対面型でないタイプ」が最も多く、五割を占める。その他のタイプは、「独立型台所」が三割、「対面型台所」が一割強である。理想のタイプとして「対面型台所」を選ぶ人が最も多く、四割を占める。その他の理想のタイプとして回答者が多いのは「DKまたはLDKにある対面型以外のタイプ」「独立型台所」である。CEL